バスク語彙における借用について

堀　田　郷　弘

0. はじめに

私とバスク語との関係は，期間も短くしかも変形的であることを，おことわりしておかねばならない。1966年Béarnの Pau 市に滞在した折，かねてより André MALRAUXの芸術論におけるキリスト教芸術についての研究資料として，特異なバスク・キリスト教芸術を探索しようと考えていたが，実際の資料蒐集において，何よりもまずバスク語を知らねばならないことがわかった。そのため，バスク地方探索中に，バスク語にかんする文献を並行して集めることになった。さらに，帰国後在日バスク人・Laurant LABARTHE 神父（Ibarla 生れで，バッス・ナヴァール方言を中心に，ラブールおよびスール方言にも通じている）にバスク語を習い，数々の研究の便をはかっていただくことになった。

以上のような次第で，バスク語に深入りしているのが現状である。

本稿は，言語学にもバスク語にも浅学な，いわば門外漢にすぎない立場で，ご専門の方々のご指導をあおぎたく，あえてロマンス語研究誌にバスク語について知る一端を綴らせていただく次第である。

表題に掲げたテーマであるが，今日まで言語学のみならず考古学，民族学，その他ほとんどあらゆる分野からすすめられているバスク語の祖語（la langue primitive）研究において，とりわけ言語学において中心となっている語源研究の成果をふまえて，私の知るところを紹介するのが目的である。

著述の形式は以下の通りである。

まず，借用語彙について述べる前に必要と思われる諸知識として，バスク語についての概略的な紹介をする。つまり使用状態，地域，さらに字母，発音と音韻組織などについて述べたい。次に借用語についての諸相，最後に，ロマンス語誌としては中心的課題とも考えられるラテン語系借用語彙についての諸相にふれる積りである。

参考文献として，次のリストを掲げておく。文中は，その番号を≪ ≫で示す。

1. M. de Azkue : Diccionario Vasco-Español-Francés. 1905, Bilbao.
2. P. Lhande : Dictionnaire Basque-Français (Dialectes Labourdin, Bas-Navarrais te Souletin). 1926, Paris.
3. R. Lafon : Corrections et Additions aux Dictionnaires d'Azkue et du P. Lhande. (Academia de la Lengua Vasca, 「Euskera」の抜刷，号数不明)
4. J. Larrasquet : Le Basque de la Basse-Soule orientale. 1939, Paris.
5. A. Tournier et P. Lafitte : Lexique Français-Basque. 1953, Bayonne.
6. Ph. Aranart et P. Lafitte : Vocabulaire Français-Basque. Bayonne (sans date).
7. F. Mispiratzeguy : Dictionnaire Français-Basque. 1963, Paris (D. Souletin).
8. Dictionnaire Français-Basque, Basque-Français. 1967, Zarauz.
9. Vocabulario Vasco-Castellano & Castellano-Vasco. 1966, Zarauz.
10. E. de Arriage : Lexicón bilbaíno. 1960, Madrid.
11. P. Lafitte : Grammaire Basque (Navarro-Labourdin littéraire). 1962. Bayonne.

12. S. Arotçarena : Grammaire Basque (Dialectes Navarro-Labourdins), 1951, Bayonne.
13. L. Michelena : Textos Arcaicos Vascos. 1964, Madrid.
14. Ezkila : Méthode Basque pour Débutants. 1963, Urt (D. Labourdin).
15. La Gran Enciclopedia Vasca, t. I & II. Bilbao (論文, 評論, 報告などの再録集)。
16. S. de Alture : Fonética y Etimologia Euskéricas. (「Eusko-Jakintza」 Vol. III-IV, 1949-1950, Sare).
17. O. Bloch et W. v. Wartburg : Dictionnaire Etymologique de la Langue Française. 1964, Paris.
18. 和田祐一：バスク語の音声と音韻構造（関西学院大「人文論究」19巻4号, 昭44. 1.）
19. 市川三喜, 高津春繁, 服部四郎編：世界言語概説。上下巻, 1969年, 研究社（第9版）。
20. 堀田郷弘：バスク語文法（ナファロア・ラプルディ方言）, I～III。（市邨学園短期大学「人文科学論集」5～7号, 1969～70年）。

古文献としては, 文献≪13≫に収録, 紹介されている古代の碑文から中世の写本類, XVI～XVII世紀の断片的バスク語文献, 文献≪15≫に複製で収録されている文献, その他同じく複製であるが, 現在のところ印刷文献としてバスク語最古のものといわれる以下の2点を利用した。

21. D. B. Dechepare : Lingvàe Vasconvm Primitiae. 1545, Bordeaulx. (Tirada aparte de la Revista Internacional de los Estudios Vascos, año 27, tomo XXIV, No. 4, Octubre-Diciembre, 1933).
22. Leizarraga : Iesus Christ gvre Iaunaren Testamentv Berria. 1571. (H. Schuchardt : Primitiae Linguae Vasconum, 1947, Salamanca. に収録, 注解されているもので, edición Schuchardt と呼ばれるもの）

その他, Labarthe 神父から寄贈されたバスク研究誌「Eusko-Jakintza」, 「Gure Herria」, バスク語紙「Herria」などの諸旧号, また来日のさい貴重な指導をうけることができたEtienne Salaberry神父（Bayonne の Séminaire高等課程の校長で, 哲学者。ラブール方言）, Michel Dufau 神父（Bayonne の司祭）らによる録音資料, Jean Haritschelhar 氏（Musée Basque de Bayonne の館長でバスク研究者）の好意による「Bulletin du Musée Basque」誌, また1967年に京都大学ヨーロッパ学術調査隊が購入した諸文献資料（参照, 京都大学人文科学研究所調査報告第24号, 梅棹忠夫・竹内成明編「バスク関係文献資料集」1968. 12）など, を利用させていただいた。

また, 在仏中バスク探索に同行させていただいたりした関西学院大学和田祐一助教授には, 本稿を含めて日頃からいろいろご教示をいただいていることを感謝の念と共に記しておきたい。

1. バスク語地域

バスク語（かれらの言葉でエシュクアラ, eskuara, euskera と呼ばれる）は, ピレネー山脈西部を中心にフランス, スペイン両領にまたがる地域で用いられている。いわゆるバスク7州（バ・Zazpi Eskual-Herriak）とよばれるのは, フランスの3郡ラブール, バッス・ナヴァール, スール（バ・Lapurdi, Baxenabarre, Ziberoa）とスペインの4県ビスカヤ, ギプスコア, アラバ, ナバラ（バ・Bizkaia, Gipuzkoa, Alaba, Nafarroa）で, 図Iのごとく, [1] スペイン側が広く 17689 km², フランス側 2869 km², 人口約176万の地域である。

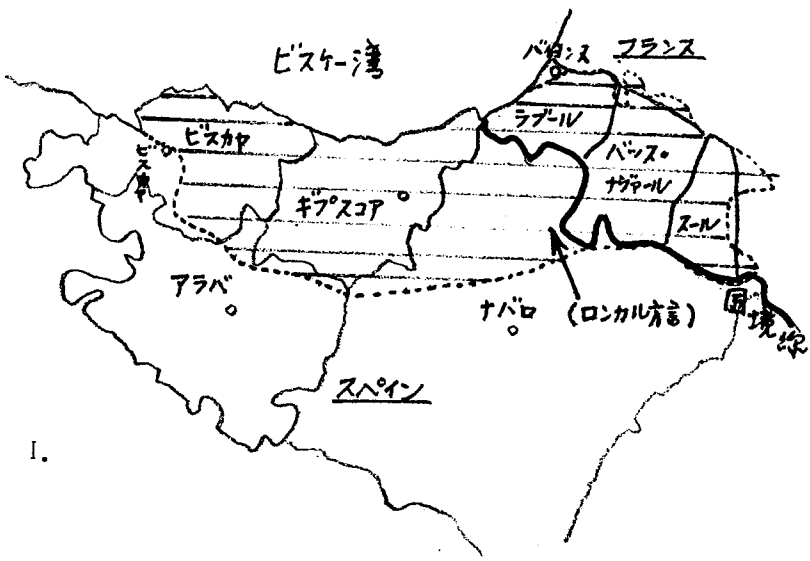


図 I.

それぞれがフランス語かスペイン語を重用する「二重言語(バ・bi mintzai redun)」地域であり，またロマンス語地域の中に孤立する「言語島」である。独立した国家として成立していないバスクの言語は，[2]非公用語などの社会的な条件を課せられながら，この地方に強い勢力をもつカトリック教会関係者や家庭生活など私的な場で，やっと日常言語として維持されている。

2. 方言と共通語

バスク語の方言は次の7方言とされる。フランス・バスクには，ラブール，バッス・ナヴァール，スールの3方言，スペイン・バスクには，ビスカヤ，ギプスコア，ナバラ，ロンカルの4方言がある。方言区分は，図Iの斜線の通り各県郡にほぼ応じているが，アラバはギプスコアとビスカヤ方言に入れられ，ロンカル(Roncal)は矢印のナバラ県東北部で使われている。[3]ただしロンカル方言は消滅の傾向にあるといわれている。またさらに厳密に区分する場合，[4]25の下位方言を，あるいは≪1≫，≪2≫，≪4≫の辞書にみられるごとく，ほとんど村単位の区分さえ考えねばならないほどである。

こうした「方言のモザイク」のバスク語であるが，げんざい共通語あるいは標準方言は決っていない。しかしバスク共通語への努力は続けられてきたし，現在も続けられている。

語彙面から見れば，辞書類では，フランス3方言に共通する単語，語形とスペイン4方言に共通するものに多くぶつかる。この大別の現状をもととして，とりわけ文章語の観点からの共通語への具体的動きが認められる。

フランス側では，ラブールとバッス・ナヴァール方言をもととした「新ラブール方言」dialecte néo-labourdin(≪11≫p.6)を，[5]スペイン側では，地理的に中央に位置し，方言使用地域も広いギプスコア方言をもととする標準方言創造への努力がなされている。そ

して，将来は，これらフランス側，スペイン側の新方言をもととした全バスク共通語の誕生が予測されている。フランス・バスクでは，[6]文法書，学習書も，この新方言への方向で著わされたものが多く，唯一のバスク語新聞「Herria」(Bayonne)もこの傾向に大いに寄与している。またスペイン・バスクでは，Bilbao にある Academia de la Lengua Vasca がバスク全州の共通語を目標とする努力をしている。最大のものは，共通字母作成と奨励であり，例えばフランス・バスクにおける ch を x に統一する動き，スペイン・バスクにおける rr を ŕ にする動きを実現させるまでの成果をあげている。その他[7]類義語と併存する外来語の整理，外来語の意味の限定など，もろもろの努力がみられる。

以下，単語の方言指示の略字として，フランス3方言に共通なものを「フバ」，スペイン4方言に共通なものを「スバ」，また7方言それぞれを，ラブール＝L，バッス・ナヴァール＝BN，スール＝S，ビスカヤ＝B，ギプスコア＝G，ナバラ＝N，ロンカル＝Ŕとする。

その他の略字として，「ラ」ラテン語，「ロ」ロマンス語，「フ」フランス語，「ス」スペイン語，「バ」バスク語を示す。

3. バスク正字法

現在のバスク文字は，Academia de la Lengua Vasca が定めたラテン文字によるバスク字母である。この制定は，[8]まだおよそ50年の歴史しか持たないため，各方言の歴史的条件に限界づけられ，全般的な統一をもたらすまでには到っていない。

3.1 バスク字母（≪2≫による）。

A, B, D, D̃, E, F, G, H, I, J, K, L, L̃, M, N, Ñ, O, P, R, Ŕ, S, T, Tx, T̃, U, Ü, X, Y, Z.

印刷物にあらわれた限りにおいても，各方言によって，上記の字母の採用には様々な差異が認められる。

しかし大別して，フランス語圏，スペイン語圏の区別ができよう。

3.1－1 フランス・バスクにおける最大の特徴はHの存在である。

「フバ」haur，「スバ」aur（子供），

「フバ」ohar，「スバ」oar（通知），etc.

XをCH，TXをTCHと表記する。

「フバ」etche，「スバ」etxe（家），

「フバ」choko，chokho，「N.R」xoko（隅），etc.

D̃, L̃, T̃, Ŕ を DD, LL, TT, RRと，さらに「BN」では，D̃をJ（/d̃/＝/j/），Ñを GN（/ñ/＝/gn/）とさえ書くことがある。

[9]Majia（人名＜Maria），gnabar(同心円模様の＝ñabar)，etc.

Üは「スールのu」とよばれ，[10]ほとんどスール方言でしか用いられない。フランス語のu〔y〕の影響と考えられ，この方言ではu〔u〕とü〔y〕とを異音として用いている。

bürümutx〔byrymutʂ〕(頂を切られた)，huntarzün〔huntarsyn〕(富)，bürü〔byry〕(頭)，pürifika〔pyrifika〕(浄化する＜フ・purifier)，müble〔myble〕(家具＜ペアルン・muble)，etc.（≪4≫と≪7≫より）。

スールの一部ではĩ（鼻音）が用いられる。

khatĩa（鎖），etc.（≪1≫より）。

Yは，「フバ」全域にわたって，ほとんど外来語と固有名詞の一部においてIと併存的に

用いられているだけである。

Salaberry, Salaberri（人名．ゴート語 sala, 家＋ berri, 新しい，の合成語）; puyo, puio（丘，＜フ・puy）; poyal（つるべ，＜ス・poyal），etc.

3.1－2　スペイン・バスクでは，アカデミア制定の字母の使用が一般的である。

ただし，Ŕ, L̃は，それぞれスペイン語の /RR/〔r〕, /LL/〔ʎ〕と一致するため，[11]まだ圧倒的に RR, LL を用いることが多い。

また「B」では，XをS̃．TXをTS̃と書くことがある。この正字法を用いている Azkue ≪1≫の説明では，XはSの diminutif としてあらわれることがほとんどであるため，d→d̃, l→l̃, t→t̃に例って S→S̃が正当であるとしている。

etse̅ = etxe（＝「フバ」etche, 家）.

3.1－3　字母制定以前，少くともバスク語擁護の動きがバスク人の中から生まれてくる XIX 世紀以前の資料におけるバスク語の表記に用いられた文字はどうか。この問題については，XVI 世紀まではバスク人がバスク語によって著わそうとした文献がまだ確認されていないこと，またつねに支配されていたバスクの各時代の各地域を通じて，それぞれ支配する他言語の音素表記を借用してバスク音を写していたこと，またバスクの言語活動が今日に到るまでつねに口頭中心であること，などを併せ考えねばならない。

こうした諸条件を考慮して，XVI 世紀以前の他言語資料に断片として存在するバスク語と，XVI 世紀以後の全文バスク語による印刷文献とを区別して調べてみた。

a)　C, Çの存在

Cの場合，ローマ時代と推定される碑文では，現代のGにあたる。

[12]cison, cisson（＝gizon, 人），[13]corri（＝gorri, 赤い）。

中世ではC＝K。[14]IAVNINCO(＝jaungoiko, 天主の），[15]Dorreco（＝Dorreko, 人名），etc.

XVII 世紀でもC＝K。[16]hilzecotan（＝hilzekotan, 死において），etc.

Çの場合。XVI 世紀以後の印刷文献（特にフランス地域）では，ほとんどがÇ＝Zである。

XVI 世紀の[17]guiçon（＝gizon, 人），gauça（＝gauza, 事物），XVII 世紀の[18]çahar（zahar, 老いた），etc.

b)　Jの不在

[19]XIV 世紀以後漸次Jが確認されてくるが，iとjの混同がなくなるのはXIX 世紀に入ってからである。Dechepare ≪21≫もLeizarraga ≪22≫もiのみ用いている。

c)　その他，とりわけバスクの3種の摩擦音/S/=〔ʃ〕, /X/＝〔ʂ〕, /Z/＝〔s〕を表記する文字には混乱がみられる。例えば，/Z/に対してTZ，/S/にZ，/X/にTSあるいはZが用いられている。

3.2　バスク語の発音と音韻組織

バスク語の音韻組織に関する研究は，部分的にはかなり詳細になされたものが多いが，最大の欠点は，国際音声記号による体系的な表記が見当らないことである。この点について，関西学院大学和田祐一助教授が昨年発表された参考文献≪18≫は，非常に貴重なものである。この項は，氏の示されたバスク母音体系および子音表をお借りして，説明を加えていきたい。

原則として，バスク語では一字一音で，全ての文字が発音される。ただし正字法上の ts, tx, tz, また正字法の変形（3.1参照）の dd, ll, tt, nn, rr などについては，後に説明をする。

3.2－1　母音

[20]バスク語の母音は次の5つである。

a〔a〕, e〔e〕, i〔i〕, o〔o〕, u〔u〕.

スール方言のみ ü〔y〕が加わり6つとなる。（3.1－1参照）。

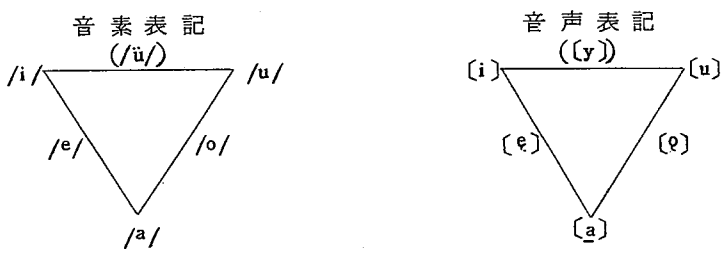
原則として，/e/と/o/とは開音にも閉音にも偏しないが，5種の母音構造のため，その許容度は大きい。

また軽く鼻母音化することがあるが，それは次の場合である。

母音＋h＋母音の前の母音：ahat

母音＋m, n＋子音　の母音：ampa, mendi

3.2－2　母音体系（≪18≫, p. 20）



3.2－3　重母音（フ・diphtongue）は以下の[21]6種である。

ai〔ai〕, ei〔ei〕, oi〔oi〕, ui〔ui〕, au〔au〕, eu〔eu〕.

これらは決して単音化しない：aita〔aita〕（父）.

その他，[22]接尾単数定冠詞－a が付加された場合の－ua, －ia は〔wa〕,〔ja〕の音となることがある。

また－ea（特に接尾冠詞 －a との音衝突の場合）は〔ia〕, －oa は〔ua〕になる。

「フバ」gazte－a〔gastia〕（若者），「BN」gatu－a〔gatia〕（猫），etc.

「S, BN」では有声破裂音（b, d, g）＋oi は ei〔ei〕となり，綴りにもあらわれる。

hogei（＜hogoi, 20), hodei（＜hodoi, hedoi, 雲），etc.

「L」の古形としては語頭に ia, ie, io, iu がみられるが，現在では i＝j〔j〕である。

ioan→joan〔joan〕（行くの語幹）。

3.2－4　子音格子（≪18≫, p. 21）

		両唇	歯唇	舌尖前	舌尖中	舌面前	舌面中	舌根
破裂音	清	p		t			c	k
	濁	b		d			ɟ	g
破擦音				ts	tʃ	tɕ		
鼻音		m		n			n	
振動音	多			r				
	単			ɾ				
側流音				l			ʎ	
摩擦音			f	s	ʃ	ɕ		
半母音							j	

音標文字による子音音素表

両唇	歯唇	舌尖前	舌尖中	舌面前	舌面中	舌根
p		t			tt	k
b		d			dd	g
		tz	ts	tx	~	
m		n			n	
		rr				
		r				
		l			ll	
	f	z	s	x		
					j	

正字法による子音音素表

3.2－5　hは，子音の後にくる場合に無音になることが多いが，ほとんどの場合帯気音である。

hとの重子音は次のようなものがある。

ph, th, kh, lh, rh, nh.

（なまぬるい）の意味の語は，「フバ」では ephel〔ephel〕，「スバ」では epel〔epel〕である。

3.2－6　バスク語では同じ子音字が重なることはない。dd, ll, tt, nn, rr はすべて d̃, l̃, t̃, ñ, ŕ として，子音格子（3.2－4）にみる通り単字，単音である。

3.2－7　異なる子音の重なる重子音は，ほとんど次のものに限られる。

Cl → fl, gl, kl.

Cr → dr, fr, gr, kr, tr,(br).

floka(花束), glorifiski(晴やかに), kleda(チョーク), dretxa(方向), Frantzia（フランス），Grezia（ギリシャ），Kristo（キリスト），trapa（わな），etc.

kl, kr, tr 以外は最近の外来語(≪11≫)，また br はフランス語からの借用（≪1≫）という説がある。

「S」brẽna, <古フ・brén, braye ;「フバ」pobre <フ・pauvre.

また Lafitte, Azkue 共に pl の不在を指摘しているが，≪14≫では plama〔plama〕(頁)，plaza（広場），enplegatu（使用する）などがみられる。

しかし，anaptixis（重子音間母音挿入）の傾向のつよいバスク語では，これらは全て外来語か，擬音語に現われるものと推察される。

3.2－8　バスク単語は開音節で終ることが多く，子音語尾は次のものに限られる。

k, t, t̃, s, z, x（＝ch), ts, tz, tx（＝tch), r, l, l̃, n, ñ.

擬音語には t 語尾が多い。

「N, B, G, L」palast（波さわぐ音），「N, BN, S」xixt（敏速な動きを表わす）。

3.2－9　/d̃/〔ɟ〕は，「L, BN」の一部では〔ʒ〕に近い音になるため，フランス語の/j/にならって j の綴りがあらわれることがある：Majia（<Maddia <Madia <Maria).

また －in, －il ＋ d の場合 d→d̃：indar → ind̃ar(力)，「B」bildur → bild̃ur (粒).

3.2－10　/f/はバスク本来のものとは思われない。そのほとんどが外来語にあらわれている。しかも語頭 f の単語には，その語頭が n, p, ph, b などに置換えられている異形の併存するものが多い。

fago, pago, phago, bago（ぶなの木）；ferde, pherde, berde（みどり），fartza, phartza, bartza（虱の卵），phesta, besta（祭），etc.

3.2－11　語尾および音節末に/m/があらわれることはない。

Adan, [23] Jerusalen〔jeruʃalen〕

また m＋b,p の m は n となる。

zembat → zenbat〔senbat〕(cf.「BN」zonbat)

フランス・バスクではフランス語の影響（embaucher, empocher etc.）から綴り字に m が保存されることがあるが，その場合でも〔n〕と発音される：「L」zembat〔senbat〕, etc.

3.2－12　語頭の/r/は，外来語の [24] Rusia（ロシヤ）が「L, BN」で認められるのみである。2方言以外では，r 語頭の借用語をバスク語化する eŕ－，aŕ－ の法則通り Eŕusia, Errusia である。

3.2 - 13　摩擦音 /s/ は〔ʃ〕であるが，[25]スールではフランス風に〔z〕がきかれる。ビスカヤ，ギプスコアの一部では[26]スペイン語の /z/〔θ〕に影響された音がきかれ，綴りにもあらわされる。バッス・ナヴァールでは口蓋化が強い。

3.2 - 14　/x/〔ɸ〕も差異がみられる。とりわけ /s/ の不安定に重なるかのように，/s/〔ʃ〕との混同が著しい。

3.3　アクセント（バ・boz - azkargune，フ・accent tonique）。

バスク単語は，構文，感情，個人的次元におけるもの以外は，アクセントをもたない。全ての音節は等価（フ・isotonique）である。

ただし，スール方言は例外である。例えば，[27]他方言では同一の ama＋接尾単数定冠詞 a ＝ ama と，語幹あるいは接尾ゼロの接尾不定冠詞の ama を区別して，前者を amá，後者を ámaとしている。また[28]名詞，形容詞の曲用における接尾複数定冠詞および接尾ゼロの不定冠詞が付加された能格（フ・actif）はともに -ek の格語尾をもつが，それを区別して，それぞれ gizunék，gizúnek としている。

4.　バスク語彙における借用語

バスク民族の[29]起源は，まだ解明されていないが，その知られる限りの長い歴史を通じて，バスクは常に様々な他民族の支配をうけてきた。その歴史相が，バスク民族の特性といわれている「驚くべき保存性」によって，言語面にもたらしたもの，それがバスク語彙における外来語の多量，多種ということであろう。そのためか，起源あるいは祖語の研究，語源研究が非常に盛んである。

しかし，現状では解明されていないことが余りにも多く，当然，重要な音韻変化との関係も含めて（例えば，バ・piko はラ・ficus からの借用といわれているが，ficus そのものが地中海の諸語に見出され，仮定共通基語からのバスク語変化，ラテン語変化とも推論できよう），不明な点が多く残されている。

以上のような条件の他に，次のような「借用語」の意味限定を加えておきたい。

つまり，「借用」とは，他言語の音を，バスク語の音韻体系に従ってその音素のどれかに吸収する現象に限定する。

バスク語彙には，広義の借用と考えることが出来るような，次のような借用語も多く見られるからである。それは，原語が複合語，合成語の場合，原語の音声に関係なく，複合，合成の各要素の意味のみを直訳的に借用した語が多いことである：

lursagar（lur 地＋ sagar リンゴ＞じゃがいも。cf. フ・pomme de terre ＜pomme リンゴ＋ de ～の＋ terre 地）。

burdinbide（burdin 鉄＋ bide 道＞鉄道。ef. フ・chemin de fer），etc.

また，ある言語より別のある言語を通しての借用語は，後者の言語からの借用とみなす。例えば，ポーランド語からフランス語に借用され，更にバスク語への借用された Polka（ポルカ）＜フ・Polka＜ポ・polska＜ポ・polski，その他 alkool（アルコール）＜フ・alcool ＜古フ・alchol，alkol ＜ラ・alkol，alkohol ＜アラビア・alkohl，などは，全て最終のフランス語からの借用とみなす。

4.1　借用の対象言語

参考文献にかかげた辞書において，借用と認定されている語彙をとりあげて．それらの借用の対象言語を並べれば，バスク語彙の[30]75 %を占めるといわれるラテン語あるいはロマンス諸語（フランス — ガスコーニュ，ベアルン，プロヴァンス；スペイン — カスティリア etc.）をはじめとして，その他[31]ケルト，ゴート，ハム・セム系諸語，英語など非常に広範囲にわたっている。

二重言語の弱小言語という条件から，最近でも，フランス語スペイン語からの借用が，それぞれの領土で激しく，そのため反動として[32]purisme（国語純化擁護）の動きもまた活潑である。

4.2　借用語の大部分は，類義語（バ・izenkidea）として，語源不明のあるいはバスク国字化のすすんだ古い借用語を併存させている。

（伯，叔母）tanta, izaba, izeba；（家族）familia, etxekoak；（畑）landa, alhor；（自転車）bizikleta, pírípita；（自動車）oto, tarranta, beribil, etc.

これら併存する類義語群は，各方言によって，併用非併用，併用の場合の使用頻度，意味上の派生による用法などの差異が認められる。

併用非併用および使用頻度について，arbolaとzuhaitz（樹木）の例。「スバ」ではほとんどarbolaしか用いない。zuhaitzの併用はギプスコアのラブールに近接する小地域でしかない。「フバ」では両語を用いるが，頻度，使用地域からして，zuhaitzがarbolaを圧倒している。

また「じゃがいも」のpatataとlursagarは，前者は俗語としてしか用いられない。

また「自転車」のbizikletaとpírípitaは，文章語ではpírípita，口語ではbizikletaの使用傾向が認められる。

意味上の差異についての例。etxekoakとfamiliaにおいて，etxekoakは使用人を含めての「家のものたち」，familiaは親子を主とする血縁の「家族」として用いられている。

また，もとは「対」という意味のbiritxiとpaireaにおいて，biritxiは人間の「双生児」という意味に限定されてしまっている。（Labarthe神父による。）

4.3　借用語のバスク同化状態については，一見して外来語と判別されるものもあるが，一方では，[33]豊富な接尾辞による派生，あるいはバスク単語との合成などの造語，さらにはその際の音便による同化の深化によって，ほとんど外来語とみなされぬほどになっている借用語がみられる。日本語における漢字の存在を思わせる状態であろう。

試みに，[34]外来語の広範囲な単語族（フ・famille de mot）の例をしめしておく。

＊ケルト系の語幹kar系統（運搬の理念）

karga	積荷	ekartzale	肥沃な
kaŕo	二輪馬車	ekargaitz	堪えられない
kaŕeo	車での運搬	gaŕaio	二輪馬車
kargu	機能	gaŕeatu	馬車で運ぶ
kargatu	積荷する	egari	堪える
kaŕeatu	車で運ぶ	erakaŕi	曳きずる
ekaŕi	運ぶ	erakarpen	魅力
ekarle	運搬人	erakarle	引率者

, etc.

＊ラテン系のmaita（maitha, maite）系統（愛の理念）

maitaerazi, maitagŕi, maitagaŕiki, maitagaŕitasun, maitagaŕitu, maitago,

maitagune, maitakari, maitaketa, maitakizun, maitakortu, maitakunde, maitale, maitamin, maitapen, maitasari, maitatasun, maitati, maitatsun, maitatu, etc.

4.4　借用語の意味分野は，ほとんどあらゆる事柄にわたっているが，主に理念的，抽象的な概念を表わす語が多い。

arrazoin（＜フ・raison, 理性），esperantza（＜フ・espérance, ス・esperanza, 希望），karitate（＜ラ・caritatem, 慈愛），kontsolamendu（＜ラ・consolor＋mentum, 慰め），pazientzia（＜ス・paciencia, 忍耐），etc.

また新事物に対しては当然借用語が多いが，旧来の語の合成あるいは擬音語で造語する場合がある。

（自動車）の場合，借用語oto（＜フ・auto），合成語beribil（＜bera 自分自身，自律＋erabil 動き），擬音語tarranta　の3語。

（自転車）の場合，借用語bizikleta（＜ス・bicicleta, フ・bicyclette），擬音語pi-rripita の2語がある。

借用語のこの傾向は，多量性とあいまって，[35]「外来語を除けば，具象的，物質的な事柄しか表わすことが出来なくなるだろう」といわしめるほどである。

5.　ラテン語およびロマンス諸語からの借用にみられるいくつかの現象。

バスク語の音韻体系に従って他言語の音をバスク語の音素のどれかに吸収する借用現象一般のうち，ラテン語を中心とするロマンス諸語（主に近代）に関係する現象の主なるものをいくつかまとめてみよう。

5.1　原語のアクセントは消失する（cf. 3.3）。

5.2　原則として，全ての音節は残る。

ラ・miraculum→「L.BN」mirakulu，「N.B.G, L」mirakuilu，「Bの一部」mirakuru.

参考，ロマンス諸語においての子音間の母音i，uの脱落：ラ・miraculum→フ・miracle, ス・milagro.

5.3　語末のmの脱落（cf. 3.2-11）。

ラ・dolorem→「L, BN, S」dolore.

ラテン語からの借用のほとんどは対格形からである。[36]母音に続いて語尾におかれたmは古典ラテン語においてさえ，弱く発音され，無音になる傾向にあった。

参考，ロマンス語でも，語末のm一般の脱落は，早くから始まっている。

5.4　母音間の鼻音〔n〕の脱落，または帯気音hとの置換え。

ラ・anatem→「N, B, BN」aate，「L, BN, ahate（鴨）.

ラ・honorem→「N」oore，「フバ」ohore（名誉）.

ロ・don→「スバ」doa，「フバ」doha（天賦の質）.

[37]XIII 世紀ナバラの人名では，ほとんど脱落している：Aznar→Aceari，Lazcano→Lazkao.

5.5　語頭の閉塞音（p, t, c）の有音化。[38]古い時代に多いといわれる。

ラ・pacem→「N, B, R, L, BN, S」bake（平和，cf.「G」pake）.

ラ・pix, picis→「N」bizka（鳥もち，cf.「N, G, B」pika，「S」phika）.

ラ・tempora→denbora, dembora（時）.

ラ・ tinitus →「B, G, BN, L, S」 dinda (鐘の音).

ラ・ causam→「N, B, G, L, BN」 gauza (事物)

近代ロマンス諸語からの場合は，有音化をしない場合が混在している。

ス・ paseo →pasea(散歩)；polvo →bolbera(埃).

フ・ patraque →「L」 patraka (不器用)；pisser →「S」 bixbix (尿).

ス・ tonto →tonto(頓馬な)；torre→「N, BN」 dorre(塔).

フ・ tomate→「フバ」 tomate (トマト)；tarauder →「L」 daratelu (ねじ切り).

ス・ cambio →「BN」 ganbio (交換).

フ・ catif →「BN, L」 gathibatu (押える).

5.6 鼻音〔n〕〔m〕または流音〔l〕に続く閉塞音が有音化される場合がある。

ラ・ tempora→denbora, dembora (時).

ラ・ altare →「N, R」 aldare (祭壇. cf.「B」 altara, 「G」 altare).

ラ・ voluntate→「L, BN」 borondhate, 「S」 borondate(意志).

中世ナバラの人名, Laurenti →Laurendi.

5.7 /ll/, /l/ の帯気音化(lh)。

ラ・ pilum→「L, BN, S」 bilho (動物の毛, cf. 「N, R」 bilo, bi~lo).

ラ・ cellaria→「S」 gelharia (召使, cf.「N」 gelari).

5.8 語頭の摩擦音〔f〕は/p/さらには/b/に変わる。またフランス・バスクではh，スペイン・バスクでは脱落も認められる。

ラ・ [39]ficum→「G, R, L, BN, S」 piko, 「B」 iko (いちじく, cf. 「L」 fiko).

ラ・ faba →baba (豆, そら豆).

ラ・ fascem→「BN, S」 haxe, 「R」 axe (小荷物).

参考, スペイン語では f →h：higo, habe, hato.

近代語も同じ現象が認められるが，〔f〕を保存する傾向がつよい(cf. 3.2 - 9)。

ス・ falta→falta(誤り), フ・ farce, ス・ farsa→「L, BN」 fartza, farza (小話, 笑劇), etc.

ス・ falda →「BN, S」 halda (裾, 端), フ・ fournir→「L, S」 horni, 「N, B, G」 orni (貯え), etc.

5.9 母音間のlは，よく/r/となる。

ラ・ voluntate→「N, B, G, BN, L」 borondate, 「S」 boronthate, 「R」 borontate (意志).

現代バスクでも，いくつかの単語間で/l/,/r/の交替が認められるという。

5.10 語頭の唇音〔p〕,〔b〕の/m/への置換えが認められる。p →mの場合(5.5)からして，/p/→/b/→/m/と考えられよう。

ラ・ putillum→mutil (少年).

ラ・ persica→「N, G, BN, L」 mertxika(すもも).

俗ラ・ pantica→「BN」 mantike(胃).

ラ・ bacillum →makila, 「フバ」 makhila (棒).

ラ・ balmeum→「L, BN」 mainhu(入浴).

ロ・ banco →「L」 manka(食器台).

プロヴァンス・ bica→「N, NB」 miga(若い牡牛).

ス・ bauprés → 「N, B」 maspreza (やりだし).

フ・ bâton → 「BN」 matho (太い棒).

また語頭の〔f〕も同じ現象が認められる。(5.5) 及び (5.8) から〔f〕→/p/→/b/→/m/と考えられよう。

ラ・ funem → 「BN」 muin, 「N, G, L」 muiñ (脳).

フ・ fartouille → 「S」 marfuĩa (整髪の一種).

5.11 〔v〕はほとんど/b/になる。

ラ・ verba → 「フバ」 berba (語, コトバ).

ラ・ via → bida, bide (道).

フ・ visite → 「L」 bisita, 「S」 bijita (捜索).

参考. スペイン語における v = 〔b〕: ス・ vista → bixta (見ること), etc.

また, 〔v〕から/m/への置換えがみられるが, これは〔v〕→/b/→/m/と思われる。

ラ・ vagina → magina (さや).

ス・ varón → 「N, BN, L, S」 moróin (14～20才の少年).

5.12 バスク語に存在しない重子音 (cf. 3.2-7) に対して, それをさけるためいくつかの現象が認められる。

a) 重子音間に, 次に来るのと同じ母音を介入させる (ス・ anaptixis)。

ラ・ sacra → 「N, B, G, R, L, BN」 sagara (聖体奉挙).

b) 子音の一方を脱落させる。

ラ・ florem → 「N, G, R, L, BN」 lore, 「B」 lora (花).

ラ・ planta → 「N, G, L, BN, S」 [40] landa, 「B」 landara (植入地, 畑).

ス・ doctor → 「B, G」 dotor (医者).

c) バスク語の重子音のどれかに吸収する。

5.13 母音＋鼻音〔n〕の場合, 〔n〕の前に〔i〕を挿音する。

ラ・ sonum → 「フバ」 soinu (音楽の音).

ラ・ mancus → 「N, G, BN, L」 maingu (不具の).

ス・ capitán → Kapitain (頭目).

また, 語中の〔i〕を〔n〕の前に転位することもある。

ラ・ benedica → 「B, G」 bedeinka (祝福).

ラ・ rationis (フ・ raison) → 「L, BN」 arázoin (理性, cf. ロ・ arrasoua).

5.14 語中の子音の移動がしばしば認められる (フ・ métathèse)。

ラ・ cumulum → 「N, L, BN, S」 mukuru, 「R」 mukulu (沢山の).

ラ・ occupatum → opukatu (占める).

5.15 発音の困難な語頭の子音, 子音群には, 母音が付加される。

a) r-: ラ・ regem → erege (王), [41] ラ・ roccam → 「B, G, R, BN」 aroka (岩), 古フ・ ris → 「B, G, BN」 iri, 「L, BN」 hiri (笑い), etc.

b) sc-: ラ・ scola → ezkola (学校).

sp-: ラ・ spiritum → 「B, N, L」 izpiritu (霊).

st-: ラ・ statum → 「スバ」 estatu (状態).

5.16 借用の時期推定の限界について。

借用の時期については, 現在では漠然とした指定しか出来ない。

例えばラテン語からの借用の場合，バスク語保持の主体がほとんど教会によるものであるため，バスクがラテン語以外の言語に支配されている時代にも，教会のラテン語からの借用の可能性が十分残されているからである。しかし，キリスト教が組織固めをするⅣ世紀以前に認められる手掛りは考えられる。例えば，Lafitte 師≪11≫は，t，c が歯擦音として発音されるのはⅢ世紀以後という説にもとづき．bake（＜ラ・pacem），laket（＜ラ・placet）などを，ラ・c＞バ/k/〔k〕によってⅢ世紀以前の借用とし，一方grazia（＜ラ・gratiam)を，t＞/z/〔s〕によってⅢ世紀以後としている。

また，F語頭のバスク単語は，特に，p，b 語頭形が併存する場合を除いて，少くとも最近の借用と推定される。というのはXⅥ世紀以前の断片文献という限界はあるが，そこではほとんどp，さらにはbに置換えられているからである。しかし，一方では，p，bに置換えられた借用語のfへの復帰がしばしばなされていること，その上類義語間の争いを考えると，あくまで漠とした推定としかいえないであろう。

また（5.15，b）で示したezkola のラテン語源説における反論も十分考えられよう。例えば，フランス古語のescole との関係である。-s-がXⅡ世紀頃発音されていたこと，語頭S＋子音はez-，またはes-となること，バスク語では名詞の場合，接尾単数定冠詞-a をつけて示すことから－e＋a → －a が考えられること，などを考えざるをえないからである。

ともあれ，借用時期のみならず．借用そのものを含めての最大の難点は，口頭言語活動が常に中心であるバスクには，極端に文献資料が少ないことであろう。

6. ラテン語exemplum(写し)から，フランス語exemple（＜essample XI世紀），スペイン語ejemploへの変化と，バスク語etsenplu への借用の比較を紹介してみよう。

6.1 アクセント： exemplum.

バ → 消失（cf. 3.3）.

フ・ス → 保存：exemple，ejemplo.

6.2 －x－〔ks〕.

バ → 〔ks〕/kz/という重子音はない。そこで古バスクテキスト（≪1≫）通りx→ts〔tʃ〕と置換えられた。

フ → 〔gz〕と有音化してxを保存。

ス → xを音〔x〕として，jに置換え。

6.3 －em－

バ，ス → ラテン語と同じem〔em〕.

フ → am〔ãm〕.

6.4 －um－

格語尾の母音＋mのmの脱落は全てに共通（cf. 3.2－11，5.3）。

－u－については，

バ → u〔u〕を保存。バスク語で－a と並んで最もよくみられる開音節語尾である。

フ → 無音化 e muet.

ス → 男性名詞語尾のoに置換え。

7. ラテン語ăm̄are からバスク語maite まで。

maiteは（愛する，好む，気に入る）という理念を表わす語として，バスク全州で最も普遍的に用いられている。私の知る限りでは，この語が示されている最初の文献は，「Poesias premiadas en Pamplona en 1609」（≪13≫）で，「mayte」と表記されている。maiteの同意語として，laztan，onetsi(onhetsi)，onhirizte(onherizte，古くはonerexte，oneres te）などがみられるが，ほとんどmaiteに駆逐された状態である。

さて，maiteはamanteからの借用とみられるが（≪15≫），スペイン語のamanteか，ăm̄are より発展した（≪17≫）→amer→amant(XⅡ世紀，実詞）→amante(XⅦ世紀，現在の意味となる）のフランス語か不明である。

S. de Alture の amante から maiteへの変化の説明を紹介してみる（≪16≫）。

a) amante→mainte.

（5.13）の通りnの前にiを介入させ，-an-→-ain- となる。また語頭 a- の脱落は，この挿音に対する対応現象と考えられる。

b) mainte→maite.

-nt- は（5.6）に従えば-nd- となるが，次のように-nt- のnを脱落させてtを保存する現象もよく見られるものである。

hemen + tik（今後）は → emendik，あるいは-emetikとなる。

またビスカヤ方言のみに認められるdomeka（日曜日）における変化：ラ・dominica → dominka→domeinka→domenka→domekaにおける最後の段階は-nk- の -ng あるいは -k の可能性の-k 選択である。

（1970. 9）

〔注〕

1) J. Fourcade : Trois cents ans d'Histoire au Pays basque. 1967, Toulouse, p.11.

2) バスク史上民族統一的様相を示した時期は，Navarra王国（905～1234）時代と1936年のスペイン内乱期の数ケ月出現したバスク独立時代のみである。しかし，前者はラテン語が公用語であり，後者は余りにも短命であった。現在フランス側では大学入試資格試験の正式科目と認められているが，スペイン側では，内乱の際共和派だったため，民族運動すべてに厳しい弾圧が加えられている。

3) J. Nogaret : Petite Histoire du Pays Basque Français. 1928, Les Cahiers Bayonnais №2, Bayonne, p. 112.

4) M. de Lecuona : Literatura Oral Vasca. 1965, San Sebastián, p.9.

5) A. Campion y P. Broussain : Informe sobre la unificación del Euskera（≪15≫ t.I, pp. 331～337).

6) ≪11≫，≪12≫の他，O. Yon : Méthode d'Eskuara radiophonique, 1969, San Sebastián & Hendaye.

7) R. Lafon : Propositions pour la notation des mots basques dans les publications scientifiques（「Eusko-Jakintza」v. Ⅳ, Nos. 4-5-6, 1950). A. Tournier : Quelques réflexions sur le purisme et le néologisme en basque（「Gure Herria」1951, 2.). P. Oihanburu : Sur le Néologisme（「Gure Herria」1950. 4.).

8) ラブールでは1921～30年にこの制定にもとずく統一字母への試みがなされた（≪11≫ p. 16）が，現在のところ各文献によって字母は様々である（参照≪20≫，「文法・

I」p. 91).

9) Labarthe 神父による例語，辞書にはない。

10) スール以外では，「L」のBardosとHazparren，「BN」の北部Mixe地方でしか用いない。≪1≫によれば，「S」，Bardos，Mixeではbürü，Hazparrenではburüa(buru＋a)で，その他はすべてburu〔buru〕.

11) 学習書ではアカデミア字母が用いられている。Sabin Euskalduna. 1931, Zarautzや J. E. Lasa：Cómo aprender el vasco fácilmente. 1964, San Sebastiánなど。

12) ≪13≫ p.18, St.-Aventinの碑文。

13) ≪13≫ p.19, Tardet近くの碑文。

14) ≪13≫ p.22, ビスカヤのAbadianoのXI-XII世紀(?)の石標の刻文。

15) ≪13≫ p.33, XIII世紀Orden de San Juan en Navarraの納税平民名簿。

16) ≪1≫, A. Oihenart：Proverbes (1638).

17) ≪13≫ p.146, L. M. Sículo：De rubus Hispaniae memorabilibus (1533)と≪21≫.

18) ≪1≫. P. de Axular (1556-1644).

19) ≪13≫ p.57, Biblioteca de la Catedral de PamplonaのXIV世紀文書と分類されている「Oración Popular Navarra」のわずか1頁のバスク文。

20) 笠井鎮夫氏はDr. J. C. Fraucaの説を紹介している「すべてのロマンス語中，スペイン語のみがラテン語さえ有しなかった純粋5母音を持っていたが，これ実にバスク語の影響に外ならない」(≪19≫上巻，p. 602)。

21) ≪11≫，p.13.

22) ≪21≫「文法・III」では，バスク語の3種の接尾冠詞をそれぞれ「限定単数接辞」，「限定複数接辞」，「不定数接辞(接尾ゼロ)」とした。

23) /jerusaleme/と発音されることもあるという(≪2≫p. 697)。

24) ≪6≫にのみ収録。Labarthe神父によれば「BN」では，このスペイン語から借用した語形しか使用しないという。

25) ≪1≫のII，p. 194.

26) es→ez. 中南米スペイン語では/z/は昔の南スと同じく〔s〕(≪19≫上巻，p. 622)。

27) ≪4≫ p. 21.

28) R. Lafon：Expression de l'auteur de l'action en basque (Bull. de la Société de Linguistique de Paris 1960, p. 196).

29) B. Gimpera：Arqueología y Lingüística en el problema de los origenes vascos (Homenje a Don José Miguel de Barandiaran 1966, Bilbao). あるいは≪11≫によれば，紀元前6000年頃現在のバスク地方に文明形態を成立させていた地中海人種を指摘している。

30) ≪11≫ p. 27. 語彙以外ではラテン語からの借用はほとんどないといわれる。曲用ではラテン語の整理傾向とは逆に，XVI世紀バスク語で確認される8格(cf. 注28)から現代では少くとも12格以上となっている(cf. ≪20≫「文法・III」)。語順では，ラテン語と同じくかなり自由であるが，近代ロマンス諸語とはほぼ正反対とみなされる。また母音組織は，逆にバスク語のスペイン語への影響と指摘される(cf. 注20)。

31) ≪11≫による。ケルト：hogoi(20), and(e)re(婦人). 西ゴート：sala(家屋), zilhar

(銀)．ハム・セム：jabe(師)，eka (1)，etc.

32) pomadeterra (<フ・pomme de terre) やpatata (<ス・patata)の借用語にたいして，バスクの合成語lursagarra (地＋リンゴ) を，またchemindeferra (フ・chemin de fer) にたいして，burdin-bidea (鉄道)を用いるようにすすめている。

33) ≪20≫「バスク語彙形成の沿革について」を参照されたい。

34) karの例は≪11≫，maitaの例は≪2≫より。

35) ≪12≫，p. 14.

36) ≪19≫上巻，および呉茂一：ラテン語入門(岩波全書) p. 7.

37) ≪13≫ p. 33. 注5と同文献。

38) ≪1≫，≪4≫，≪13≫.

39) ≪19≫ p. 446によれば，エーゲ海先住民族の言語からのものと推察されているが，この他にも，バスク語とラテン語の単語のうち未知の同基語からのものもあるのではないかと想像されよう。

40) ≪2≫，≪16≫ではケルト語源説。

41) ≪2≫ではガスコーニュ語源説arroc.

(市邨学園短期大学助教授)